

八月七日

四時四〇分起床。夜半、ブツ切りに目がさめる。仕方ない。研究室からのFAXに目を通し、返信をしたため、プランに手を入れる。五時半修了。夜が長い、というよりも朝が長い。昨日は若松氏より、研究室ゼミ用資料として、モスクワ市内のアパート他のカタログ入手、今日はアパートのサイト、ホームセンター、できればダーチャを見て廻る予定。ホテルのある目抜き通りに面して、若松氏が借りた百坪程のフロアーは家賃月百万との事。しかし、これは天井が落ちてキャンセルしたとの事。三ヶ月分の家賃は戻ってこなかったと言う。彼の祖父は年を取ってから東欧とロシアを三ヶ月程旅したらしい。その血を引いているのだろうか。みちのくの人間の根深い北方志向かな。

昨夜のポリシヨイサーカスの空間について考えてみたい。人体と空間が実に濃厚な関係を持っていたのは確かだし、観客との関係も濃かった。身体とそれを視る視線が作り出す空間だった。佐藤健が死を覚悟してからの一年間、生きた時間は濃密なものであったろう。それを取り巻く我々にとってもそうだった。あれはサーカスだった。言い方は良くないが実にリアルな時間であった。我々は刻一刻死に向けて生きている。それを自覚した時、一秒一分が濃い時間になり、人と人との関係が自然に演劇性を帯びざるを得ない。刻一刻を生きている時間を自覚し、それを他者との関係世界にさらす事だもの。それを自覚する事によって日常空間

は時に変質する可能性を持つ。そこに別の空間が生まれるのだ。建築が空間を作るのではない。人間の意識がそれを生み出す。構造体も装置も、装飾も、その意識を覚醒させる道具なのだ。ポリシヨイサーカスの空間はまさに身体と視線の覚醒による、スベクタクルであった。そういう空間を目指してきたような気がする。私の建築の演劇性とは、無意識の中にそれを追いかけてきていたのではなからうか。全ては装飾であり、構造はそれを支える枠組みなのだ。頭を冷やして、もう少し考えてみたい。

研究室に部屋からFAX送附。着信しているかどうか不明。九時前朝食。十時ターニヤがピックアップしてくれて、若松氏のアパートへ。モスクワ川のほとりの一九五〇年代の十一階建ての6階。一〇三mで家賃が千七〇〇\$。買えば三千万円との事。3DKである。エレベーターが旧式でメンテナンスしてなさそうなのを除けば豊か。窓は全て二重。玄関扉も二重。モスクワ川沿いをアエロフロント航空まで歩く。日差しが強い。その後、クレムリン宮殿見学を促す通訳ターニヤの言をしりぞけ、ホーム・センターへ。モスクワ市の地下鉄で中心から十五分位のところに位置するカシリスカヤ駅の近くの、カシリスキー・ドヴォール(中庭)へ。ここは仰天すべき建材市場であった。私の理想とする建築部品の自由市場が現存していたのである。高圧線下の、多分建築不可地域に、日本の戦後の闇市の如くの巨大市場があった。まさに建築の秋葉原マーケットである。何千という、ありとあらゆる建材屋が軒を連ね、土曜日であるから、次から次へと引きも切らぬ購買者が車で訪れている。まさに建材バザールであった。大型トラックで買い付けにくる専門家も素人の女性も皆同じプライスであるようだ。全て廻るのには一日かかっても無理だろう。何故モスクワにこんなアナーキーな建材市場が出現したのであろうか。

五年前からの事だと言う。重量鉄骨やトイレ便器、レンガ、セメントその他ありとあらゆる物が売られている。モスクワのアパートのほとんどが古く、人々は修理を強いられる。そのマーケットは膨大である。余りにも大きなマーケット故に市民は自分の家は自分で再生せざるを得ず、又、それを苦しめない。ターニヤ女史も自分のアパートを自分で修理するし、そんな事は当たり前前の事らしいのだ。モスクワのダーチャの実体を探訪すべく訪ねて、秋葉原に出会うの図であった。驚いた。様々なアイデアが湧きに湧いてくる。十四時郊外のレストランで昼食。きのこスープ他。道中、別荘群を案内されるが、これは私の求めるダーチャではない。私が見たいのは、モスクワホーム社が作る日本のハウスメーカー風の成金ハウスではない。極く極く普通の市民のダーチャなのだ。ガイドは、やはりモスクワの良い所と思われるモノを見せたいと考えるのは人情だろうが、私の求めるモノとは大きなズレ違いがある。帰途、どこかの公園で、結婚式のカップルの大群と遭遇する。巨大なリムジンがこれでもかこれでもかという位に並び、異様な風景である。モスクワは、リンカーン・コンチネンタルのリムジンを買い占めたのであろうか。ガイドのターニヤがどうしてもクレムリンを見学しろというので、渋々、赤の広場へ再び行く。ここも又、結婚式カップルの大群であった。そして、リムジンの群れ。まるでリムジンのアパッチ砦のようで、玉ねぎ状のデイズニールランド・スタイルの建築など吹き飛んでしまう。レニン廟を横目に赤の広場を横切る。見るべきモノは無い。ミラノのガレリア状のガラスのアーケードを持つデパートの中を通って戻る。ターニヤには悪いけれど私の関心はピクリとも動かなかった。若松さんのおすすめで、モスクワ川にかけられたガラスの天蓋を持つ橋を見学。何だコリヤーという感じであった。どうも

私のモスクワの建築群に対する感性は拒否に次ぐ拒否なのであった。十七時過、シエラトン・ホテルに戻り、休む。今日一日の印象を整理するには時間がかかるだろう。十九時四十五分現在、夕食のピクアップを待ちながらホテルの部屋でメモを記す。考える事が多過ぎて、とりとめがない。しかし、若松氏はどうやら本気で、モスクワにビジネスの拠点を構える気持ちのようだ。彼の親戚は川崎汽船の役員をしていたらしく、私の交友関係と不思議にクロスしているのも奇遇である。三〇年前、私の初めての材木輸入の窓口は川崎汽船であった。川合健二と一緒に川崎汽船には度々足を運んだのを昨日の事のように思い出す。二〇時過近くの日食レストランで会食。男の従業員がサムライまがいの格好をしている変なところ。二十二時頃了。ホテルまで歩いて帰る。

八月八日 日曜日

五時前、目ざめて、メモを少々記すが、再び眠る。五時半起きしてしまう。モスクワ三日目である。何と、視たくも無いと拒否している赤の広場の玉ネギ、アイスクリーム状建築の姿が頭にこびりついて離れないではないか。どうした事か。イヤだと言う意識を無意識が侵蝕している。アレはガウディのカサ・ミラの屋上の造形群がスラブの大地に降下したもののだろうか。巨大リムジン群と玉ねぎソフトクリーム建築は何処かで結び着いているのだろうか。リムジンの過剰と玉ネギ建築の過剰とグロテスクは同根なのだろうか。双方共に装飾的産物なのか。民衆は本来的に装飾を介して力そのものを渴望する者なのか。レニン廟のデザインとモスクワ中にあふれ返る銅像群、ガガリン、ドストエフスキー、レニン、レニン夫人、ピョートル大帝のモニュメントは、リムジンと玉ネギ建築と同じ種類のものなのであろうか。少々、頭

が混乱してくる。しかし、久し振りに越境している自分を感じているのも確かである。ソビエト連邦の崩壊は二〇世紀最大級の出来事であった。あの革命がなければ赤の広場にリンカーン・コンチネンタルのリムジンが群がる風景はなかった。モスクワ市の中心の高圧線下に秋葉原建材バザールが出現する事も無かった。とすれば、民衆の自由とは何なのか、謎である。

七時半朝食。八時出発。モスクワの北東二百二〇KMの古都スズダリへ。途中、各種ダーチャを見学して廻る。仲々、先入観としてあるダーチャに巡り合わない。車の幹線は大体往復四車線の立派なモノ。その道路沿いに昔風のダーチャがあるのだが、車公害にやられて見る影もない。しかし、六〇坪程度の土地面積に平屋の小屋が林立する風景は仲々のモノである。一日でダーチャを視て廻るなんて事は不可能なのをすぐに知った。昼過ぎスズダリ着。ここの建築は良い。十三世紀の修道院その他が残っている。ここのダーチャは仲々良く、二、三軒庭園(菜園)をのぞかせてもらった。フィルムが足りない。昼食を修道院内の良く整えられたレストランで。ここの冬は素晴らしいだろうと思わせる、伝統的な木造建築が博物館状に整備されていて、見学。十五時頃スズダリを去る。途中、余りにもダーチャ、ダーチャと私がうるさく言うので、ドライバーのセルゲイが、彼の友人のダーチャへ行ってみるかと言う。ものは試しだと半ば期待もせず、途中、モスクワから一〇〇KM程のところで寄り道をする。チョコレートの手みやげを買って、シベリア鉄道駅ポクロフ近辺で鉄道を横切る。それからが凄かった。赤マツの原生林を越え、白カバの原生林も抜けて、古い小さな教会や、土葬の墓地も越えて、道なき道を延々と行く。もう今日は、モスクワへは帰れないかと覚悟を決めた頃、ようやくにして、ボブダルナ(神様の好きな所)にたどり

着く。グエルマンさんのダーチャ訪問。古い住宅部分は百年前大工だった祖父が作ったと言う。ダーチャらしいダーチャに本当にたどり着いてしまった。利根町の石川よう子さんの菜園とそっくりなのに驚く。しばらく至福の時を過ごす。サウナ小屋、その他三つ程の小屋は全てグエルマンさんの手作りらしい。木と木の間のすき間には森のコケをつめ込んでいる。お茶とビールを林の中の食卓でいただく。十八時半頃帰途につく。近くの小さな湖に寄る。美しいところであった。再び原生林の中の径を戻り、ハイウェイへ。一路モスクワへ。途中、面白いガラスの小建築に寄る。二十三時シエラトン・ホテル帰着。へ口へ口になってベッドにもぐり込む。今日は目一杯であった。

八月九日

七時半ホテルのビュッフェで朝食後ピクアップされて空港へ。九時半の飛行機でサンクトペテルブルグへ。十時半頃サンクトペテルブルグ着。ガイドが迎えてくれてイサク大聖堂横のホテル、アストリアへチェックイン。小休後、昼食へ「京都」日本食レストランへ。サンクトペテルブルグも日本食レストラン多い。色々ガイドしたがるガイド二人を尻目に今日は休みを決め込んで、ホテルに戻り眠る。疲労のどん底に居る。夜半起きて、近くのカラオケレストランで夜食。眠りながら喰べている感じであった。明方の二時頃ホテルに戻り、ベッドに倒れ込む。